

宮崎県の民家調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1966年度から始められた緊急民家調査は、本年度は青森・秋田・長野・静岡・宮崎の5県についておこなわれ、このうち、当研究所は宮崎県の調査を担当し、沢村・宮沢・宮本・村上・細見が参加した。調査は各市町村の教育委員会より提出のあった1次リストをもとにして2次61棟、3次13棟を実査した。1次リストの回収が50%にとどまり、やむなく未調査地域ができる結果となつたが、それでも宮崎県民家の概略は捉えられたものと思われる。以下、調査結果にもとづく形式の分類と、簡単な解説を述べる。

農家A 部屋の間仕切りを梁行方向に設けるのを基本とする形式で、県中央から北部全域にわたって分布する。部屋割りは2ツ割り(1)から、4ツ割り(3)までありいずれも横長平面となるが、正面側が比較的開放的であるのに反し、背面側は「戸棚」や「とこ」などで閉されるのが特徴である。地方や年代によって部分的に多少の差があり、表側より1間入った位置に盲敷居を入れる地域と入れない地域があることや、年代が降るに従って桁行方向にも間仕切りを設ける傾向があること、などもその一例である。屋根の構造はいたって単純で、梁間一ぱいに梁を渡し合掌をかけ、梁上の棟通りに「くうりよう」と呼ぶ平物を架け屋根は寄棟とするのが通例である。規模が大きくなると梁を二重にしたり、梁下に「うしづき」をいれたりしてより堅固な構造にする。材料はいずれも整形したもので丸太の類はごく特例のほかは使わない。

農家B 土間をもつ「なかえ」と座敷部の「おもて」とを別棟にし、両者を竹の樋をかけた「てのま」でつなぐ形式のもので、西諸県郡を中心とする県南の山間部はほとんどこれによって占められる。「なかえ」は土間と、いろいろのある床上部とにわかれ、間仕切りは一切用いないから「てのま」を含め一空間となる。一方「おもて」は3室(4)や4室(5)で構成され接客・居住の用にあてられる。屋根はともに寄棟で、「なかえ」は妻を、「おもて」は平をみせるのが一般的であるから変化ある外観をつくる。年代が降るに従って構架が複雑になる傾向があるが「なかえ」の梁組が側まわりのみで組み合わされ、中柱を省略しているものもある(4)。

町屋 一般的に平入が多く、なかには大規模なものもある(6)。妻入は佐土原町に限られ、塗り込めの妻をならべる、まちなみみは独特の雰囲気をもつ(7)。近々道路拡幅のために毀さ

第1図 調査民家分布図

宮崎県の民家調査

れるのは惜しい。

その他 上の分類以外のものに武家屋敷・本陣などがあり、また農家の中でもいわゆる3間取り、4間取りの普遍的なものも含まれる。

上のように農家は大きく二つのタイプに分かれ、分布も比較的明確で、Aは熊本県、Bは鹿児島県との関連性をもつ。

農家Aは今まで奈良県の十津川地方や四国の背梁部などとともに山間部の一典型とされていたが、平野部にも存在していることを知った。

第2図 民家の景観

西臼杵郡高千穂町

農家Bは「なかえ」「おもて」の建立年代の揃っている場合が少なく、このことは比較的自由に分離・接合がおこなわれてきたことを物語る。

県下を通じ建立年代の古いものは少なく、ほとんどが19世紀以降で、わずかに数棟18世紀に入るものがあるにすぎない。特に農家Aのうち3分割以上の規模のものは19世紀前半に集中しそれよりさかのぼるものはない。

年紀の資料のあるものも少なく、今回の調査では天明7年(1787)柱刻銘五ヶ瀬町藤田平雄氏宅、寛政12年(1800)棟瓦銘延岡市福良功氏宅、文化2年(1805)戸墨書銘高原町竹之下延幸氏宅、安政3年(1856)戸墨書銘佐土原町斎藤伝蔵氏宅の4例をみいだしたのみであった。

未調査地域が東臼杵郡東部、児湯・西諸県郡境、県南端といくつかのブロック状になったため、農家A・Bの接点での分布、農家Bの南限など不明な点も多い。今後の調査によって補充されることが望まれる。

(細見 啓三)

- 1 南郷村仮谷弥作氏宅
(18C末) 復原
- 2 高千穂町工藤正吾氏宅
(文化初頃) 復原
- 3 椎葉村那須晴夫氏宅
(文政～天保頃) 現状
- 4 高原町黒木嘉民氏宅
(天保頃) 一部復原
- 5 えびの市奥松豪光氏宅
(ナカエ文政頃 オモテ明治初)
一部復原
- 6 高岡町清水ミ子氏宅
(文化～文政頃) 現状
- 7 佐土原町徳丸彰一氏宅
(天保頃) 復原

第3図 宮崎県民家の諸形式